

近未来の世界遺産を目指し

財団設立 3周年記念行事

# シンポジウム&パネルディスカッション

「本丸御殿の復元検討を含む江戸城等全体構想の策定並びに

江戸東京の歴史文化資源を活かした

観光まちづくりの形成を目指す」

第1弾

2020年10月18日

共催 一般財団法人 江戸東京歴史文化ルネッサンス

共催 一般社団法人 日本イコモス国内委員会

後援 千代田区、

東京文化資源会議、外濠再生懇談会、法政大学江戸東京研究センター、  
(有)谷根千工房、(一社)文化倶楽部、

(一社)日本イコモス国内委員会第18小委員会：文化的景観

(公財)日本ナショナルトラスト、NPO法人 粋なまちづくり倶楽部、

NPO法人 たいとう歴史都市研究会、環境NGO E・C その他依頼中

# 目次

	頁	
9-1	1	江戸東京歴史文化ルネッサンス 2020年 今日の意義の検証
9-1	2	共催者ご挨拶 一般財団法人 江戸東京歴史文化ルネッサンス 理事長 小竹 直隆
9-1	3	共催者ご挨拶 一般社団法人 日本イコモス国内委員会 副委員長 苅谷 勇雅
9-1	4	会場の様子 プロジェクト事務局スタッフのつびやき
9-2	5	来賓ご挨拶 国連世界観光機関 駐日事務所 代表/初代観光庁 長官 本保 芳明
9-2	6-7	第Ⅰ部 基調講演 法政大学江戸東京研究センター 特任教授 陣内 秀信
9-2	8	第Ⅱ部 調査報告 都市史研究家 後藤 宏樹
9-3	9-12	第Ⅲ部 パネルディスカッション 学習院女子大学 国際文化交流学部 日本文化学科教授 岩淵 令治 東京大学大学院 工学系研究科 建築学専攻准教授 海野 聡
9-4	13-15	東京都立大学大学院 都市環境科学研究科教授 清水 哲夫 東京大学大学院 工学系研究科 都市工学専攻准教授 中島 直人 法政大学 デザイン工学部教授 福井 恒明
9-4	16	第一線で活躍する気鋭の研究者へ 期待こめたメッセージ 一般社団法人 日本イコモス国内委員会 事務局長 矢野 和之
9-0	17	調査研究委員会・シンポジウム&パネルディスカッション 参加メンバー
	その他資料	役員等一覧など

## 江戸東京歴史文化ルネッサンス 2020年 今日的意義の検証

1. 世界の首都は、今、歴史的文化的創造の時代に入り熾烈な都市間競争にある。先進諸国のトレンド「クリエイティブシティ」の取り組みは、歴史や多彩な文化の奥深さにより都市の品格を高めている。

2019年12月京都宣言にあるように、国連の世界観光機関（UNWTO）と国連の教育科学文化機関（ユネスコ）は、観光と文化への貢献を強化し、持続可能な開発目標へのプロセスを促進させている。

2. 「東京文化ビジョン」が掲げる伝統と革新が共存し融合する都市東京の独自性と多様性は、江戸文化やアジア、欧米に開かれたコスモポリタンの文化を発展させて、現在に至っている。しかし、既に、首都東京には、世界に誇るべき莫大な歴史文化遺産が埋蔵されている。

3. 江戸城跡は、日本一壮大で美しく、城門や石垣、豊かな水を湛えた外濠や内濠は、昔の姿を今に残し、失われた天守や本丸御殿の痕跡は、往時の姿を思い起こされる。このように雄大な景観に包まれた特別史跡江戸城跡は、十分に世界遺産に匹敵すると云われて、久しい。

一方、城下町に集められた武家や民衆にかかわる遺産、ジェンダー等の社会の問題や矛盾、また開発によって生じた災害に関わる遺産なども残されている。

こうした江戸東京の歴史や文化を世界の人々と「感動を分かち合う」為にも、その遺産について人類共有の歴史文化遺産としての本質的な価値を明らかにし、私達の使命は、次世代に継承し、近未来の世界遺産を目指していく。

4. 一方、高度経済成長期を境に、首都東京の空高く、摩天楼は今に続く。都市開発の一方で、東京の歴史性が薄れてきたことは否めない。現代都市文化と歴史性、文化的景観及び環境を尊重する都市の有り方や開発に向けて、私達も自らに問いつつ、共に学び、そして、声を上げていこう。
5. 東京の各地域では、産学官民大小のコミュニティや団体による江戸東京の多彩な文化や歴史を活かした活動や“まちづくり”が、展開され、市民の誇り（シビックプライド）となっている。多様な主体とゆるやかな交流により、都市東京の歴史文化まちづくりに貢献していく。

2020年7月

一般財団法人 江戸東京歴史文化ルネッサンス

財団設立 3周年記念行事 シンポジウム&amp;パネルディスカッション

## 共催者ご挨拶

一般財団法人 江戸東京歴史文化ルネッサンス 理事長 小竹 直隆



本日は、新型コロナウイルス感染の警戒が強まる中、ご多用にも関わらず、ご参集を賜り、誠に有難うございます。お蔭さまで、当会は、財団設立から3周年を迎えました。ご支援を戴いた多くの会員、関係者・関係機関、市民のみなさまに心より篤く御礼申し上げます。

本日のシンポジウム&パネルディスカッションは記念行事とさせて頂く次第でございます。本日のテーマは、近未来の世界遺産を目指し「2022年本丸御殿の復元検討を含む江戸城等全体整備構想の策定並びに江戸東京の歴史文化まちづくりの形成を目指す」の「第一弾」として位置付け、基本的な視点からのご議論を戴きたく設定しております。

ご来賓には古今東西奔走されご活躍の国連観光機関駐日代表の本保様をお迎えし、基調講演には江戸東京歴史文化のパイオニアにしてフィールドワークの第一人者の陣内様をお迎えしております。調査報告では都市史研究家の後藤様、パネルディスカッションでは、いま、正に、第一線でご活躍のそうそうたる気鋭の研究者のみなさまにお揃いを戴いております。さて、どんなお話しになるのか心待ちに期待しております。

当会との「共催」をさせて頂いております日本イコモス国内委員会さまには、調査研究委員会のアドバイザーをはじめ、一方ならぬお力添えを頂き、改めて篤く御礼申し上げます。また、千代田区をはじめとする下記の江戸東京の歴史や文化まちづくりをされている多くの団体、コミュニティの皆様には「ご後援」を賜り心より篤く御礼を申し上げます。

千代田区、  
東京文化資源会議、外濠再生懇談会、法政大学江戸東京研究センター、(有)谷根千工房、  
(一社)文化倶楽部、(一社)日本イコモス国内委員会第18小委員会：文化的景観  
(公財)日本ナショナルトラスト、NPO法人 粋なまちづくり倶楽部、  
NPO法人 たいとう歴史都市研究会、環境NGO E・C その他多数依頼中

当会は、2004年江戸城再建を目指す会の市民運動を創設以来、世論喚起を旨とする活動を展開して参りました。2017年財団法人を設立し、旧江戸城及び城下町の歴史的文化的価値を調査研究し、その成果や今日的意義を社会一般に普及・啓発・提言を行い我が国の文化芸術並びに歴史文化まちづくりの振興に寄与することを目的として活動を進めております。

さて、世界はいま、パンデミック・コロナ禍により、未曾有の嵐が吹き荒れ、社会経済の厳しい環境変化の下、江戸東京歴史文化ルネッサンスの事業も運動もまた、正に、大きな分水嶺の時を迎えている、と新たな認識を深めております。

これまでの調査研究委員会並びにシンポジウム等の成果や今日的意義をすみやかに、社会一般に、普及・啓発すると共に関係者並びに関係機関に対しご報告や具体的な提言の活動を進めて参ります。

本日は、誠に有難うございます。

以上

財団設立 3周年記念行事 シンポジウム&amp;パネルディスカッション

## 共催者ご挨拶

一般社団法人 日本イコモス国内委員会 副委員長 苅谷 勇雅



共催の立場から日本イコモス国内委員会を代表して一言ご挨拶申し上げます。

財団は2004年に江戸東京再建運動としてスタートし、現在はより広い観点から江戸城及び城下町の全体整備構想を検討し、世界都市東京の歴史文化のまちづくりを進める方向性が出され、2017年にビジョン・5ヵ年基本計画(案)、2018年に同5ヵ年基本計画(案)が策定されました。

昨年、日本イコモスに基本計画策定委員会を設置したいというご相談が財団からあり、そのとき私達は本格的な策定委員会をお作りになる前にさらに論点を広げて、深めて、整理することが必要なのではないかと申し上げ、その結果、今年調査委員会が発足しました。

イコモスというのは国際記念物遺跡会議のことで1965年に文化遺産保護に関わる国際的なNGOとして設立され、現在参加国は151ヶ国を超え1万人以上の第一線の専門家や専門団体が世界各地で活動を行っております。世界遺産候補の調査や勧告等の活動がよく知られておりますが、そのほか世界各地の文化遺産の保護に関する課題解決のための提言、過度な開発、あるいは戦争戦乱による破壊への警告等も積極的に行っています。現在国際イコモスの会長は九州大学の河野先生が務めておられ、107ヶ国の国内委員会がございまして私達の日本イコモス国内委員会もその一つであります。

日本イコモスは東京について個別の文化財の保存や活動には関わってきたものの江戸城やその近辺についてはここ最近まではあまり関心は持ってこなかったというのが、私の正直な感想です。2018年に日本イコモス文化的景観小委員会が文化的景観としての皇居外苑の再生に関する提言を環境大臣宛に提出致しました。特別史跡江戸城跡に位置し、皇居の森や濠と一体となり継承されてきた優れた文化的景観である皇居外苑について現在の所は内堀通りで分断されております。その景観とか環境の分断を緩和する、もしくは解消するということが必要ではないか、と訴えたものであります。

今回のシンポジウムでは第一線で江戸東京の調査研究をしておられるパネラーの先生方に加えて基調講演に陣内先生にご登壇いただくことができました。陣内先生は長年江戸東京を研究され、数々の名著を著されてきた方ですが、更に江戸東京研究の深掘りと社会的関心の拡大にチャレンジされておられます。今回の講演は江戸東京の調査研究の一つのエポックメイキングなことになるのではないかと私は期待しております。

本日シンポジウムで「江戸城等全体整備構想」と「都市東京の歴史文化まちづくり」の二つのテーマについて活発に議論され、結論の一つとして「歴史まちづくり法に基づく歴史まちづくり計画の策定」を早期に進めるよう千代田区等行政機関に提言するというようなことも一つのまとめとなればと私は思います。そういう強い期待をこめてご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。 以上

## 財団設立 3周年記念行事 シンポジウム&パネルディスカッション 会場の様子



## 財団設立 3周年記念行事 シンポジウム&パネルディスカッション プロジェクト事務局スタッフのつぶやき

**山崎 麻央** この度は当会初のシンポジウム&パネルディスカッションとYouTube公開をしました。準備の段階から先生方からボランティアの方まで沢山のご指導・ご協力いただき、また会員・関係者の皆様にはご支援いただきました。お楽しみいただければ幸いです。

**岩田 洋和** コロナ禍の中、無観客での開催でしたが、先生方の熱意がレンズ越しにも伝わってくるような素晴らしいシンポジウム・パネルディスカッションでした。YouTube配信という形で皆様にもお届けできることをうれしく思います。

**小竹 直秀** 機関誌は文字情報でのお届けでホッと一安心しています。読み応えがありますよ。

**村井 庸平** これからのTOKYOは、古いだけでも、新しいだけでもない、新たな時代に入っていくことを体感しました。文化財、都市工学、社会学、観光、多彩なアカデミックの化学反応の時代へ。いざ！

**黒田 裕治** 基調講演の陣内先生のお話聞いて江戸城は江戸時代のものという前提を疑ってみること。すなわち、明治は江戸からの連続で、そして東京は東京都見るのではなく関東平野全体で観て、しかも時空を超越しなければ真実にたどり着かない。これは世界遺産を目指す我々にとって示唆に富むテーマです。

**川野 恵可** 陣内先生の基調講演と第一線でご活躍の専門家によるパネルディスカッションのシンポジウムの司会をさせていただき大変、緊張しましたが光栄でした。全体を通して、歴史に学び、現在、未来に生かすことだと思いました。

**内田 久江** 市民運動をスタートして以来15年余り多くのご縁があり多彩な人々との出会いがありました。

静かに、時に熱く語りあう日々が積み重ねられ、お蔭様で、今日のシンポジウム等の開催に至りました。振り返り、嬉しい思い出も哀しい出来ごとも、一つひとつの思い出が、今、走馬灯のように過ります。お力添えを戴いたみなさまに心より感謝を申し上げます。

本日の準備にご尽力戴きながら参加できなかった会員、ボランティア等のみなさま、誠に有難うございました。

これからも、「空想の翼で翔け、現実の山野を往こう」と、歩いて参ります  
今後共、ご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。



財団設立 3周年記念行事 シンポジウム&amp;パネルディスカッション

## 来賓ご挨拶

国連世界観光機関 駐日事務所 代表  
初代観光庁 長官

本保 芳明



只今紹介いただきました、国連世界観光機関駐日事務所の代表を務めております本保でございます。一言ご挨拶を申し上げたいと思います。

3周年の特別記念シンポジウム&パネルディスカッション開催、誠におめでとうございます。江戸東京の歴史文化を広く捉えて、まちづくりという、さらに大きな形で議論されるようになったこと、大変時宜を得ていると思っております。

私自身は観光の仕事を長くしておりますので、その観点から申し上げますが、インバウンドは去年、約3200万人の外国人が訪れて4.5兆円のお金落とし、輸出産業として捉えれば、自動車産業、化学製品に続いて第3位になることもご案内の通りだと思えます。現下はインバウンドが蒸発してしまったという言葉が使われるくらいの状況でございます。

世界全体を眺めると、国際観光を後押しするトレンド、力は大変強いものでございます。色々な調査をしても、日本に行ってみたい人は世界に本当に多く、日本のインバウンドが活況を呈しているのはアジア諸国が経済成長してくれたおかげで、象徴的なのは一番のお客様である中国・韓国・台湾・香港だけで昨年時点、7割のお客様が日本に来ている状況でございます。

2018年のIMFの統計では、日本の一人当たりGDPは26位まで落ちており、一言で言えば、日本の国際的地位は下落し、凋落傾向が顕著だということでもあります。その中で多くの方々が注目し、力を入れているのが文化であります。いわば、経済大国の道から文化大国の道へ歩む、これが日本の活路として非常に重要ではないかと議論でございます。かつての軍事経済大国であったフランスが文化大国への道を進んだ。この後を追おうというような議論になるかと思っております。幸い日本の文化は大変豊かであることは、皆さま恐らく一致して認めてくださるところだろうと思っております。

しかし、OCD諸国の中でも国家予算の割合では最低の水準をいっています。幸い少し文化政策、文化戦略に変化が出てきており、行政組織に関するルールも随分変わってきております。こうした変化を推進されてきたのは官房長官だった菅さんで、菅政権に期待しているところでございます。

こういう流れを踏まえて、東京をどうするかということが大変重要だと思っております。しかしながら、この江戸城の問題も含めまして東京の持つ文化芸術のポテンシャルが十分に発揮されてきたかというのは、そうではないという現実にあるかと思えます。東京の歴史的な価値を再発見・再構築して、江戸東京の歴史文化に着目したまちづくりを進めることは大変重要であり、このシンポジウムに期待をするところでございます。

小竹理事長をはじめとする、財団法人江戸東京歴史文化ルネッサンスの皆さまそして共催の社団法人日本イコモス国内委員会に敬意を表しまして、本日の成功を祈って、私からのご挨拶の言葉とさせていただきます。

以上

財団設立 3周年記念行事  
第Ⅰ部 基調講演

江戸東京歴史文化のフィールドワークのパイオニアにして第一人者



財団の3周年を記念し、江戸東京の歴史文化を考える重要なシンポジウムの基調講演にお呼び戴き大変嬉しく思っております。

只今紹日本の人気観光地といえば京都であったが最近では外国人が東京に来たいという。東京は「西洋の文化を多く受け入れて近代化した都市」に見えるが、自然と対話したような江戸城の城下町として作られ、西洋化されず日本独特の都市が作られた。東京の魅力とは何か江戸のランドデザインからの視点で見てみよう。

1. 東京スカイツリーがなぜあの場所に建てられたのか

東京の街を船で観察するようにしたところ、それまで疎かにしていた東京の価値が見えてきた。大江戸鳥瞰図 江戸時代の鵜形蕙斎(くわがたけいさい)の描いた鳥瞰図で遠近法による江戸の街を表現している。鳥瞰図の視点にスカイツリーを建てた意義がそこにあり、描かれている隅田川は都市の淵にあった。セーヌ川沿いに、テムズ川沿いに発達したパリやロンドン等歴史的市街地は川沿いに発展。しかし江戸の街並みはさらに自然と一体となった都市空間を形成し、西洋や中国にはあり得ない。この視点こそが東京再発見のきっかけになる。つまり、江戸時代以前の時代や、江戸周辺のエリアを含めて時空を超えた視野でみる事とした。

2. 水都としての発展の仕方を比較してみる

江戸城やさらに浅草寺の歴史(7世紀)や待乳山伝承(推古天皇の時代)、梅若丸の民間伝承(977年)から見ると高いポテンシャルを持った土地であった。江戸時代には行楽地として栄え、遊郭や芝居小屋も移ってきたし、また漁業の発展も見られた。物流の中心である米倉は幕府方が中心で、町民の文化としては震災以後変貌を遂げていく。高度成長期に水質が悪化し臭くなって失われて行ったが今、もう一度蘇ろうとしています。



鵜形蕙斎「江戸一目図屏風」19世紀初め(津山郷土博物館蔵)

もう一つ重要なのが漁業の発展。浅草、深川、佃島(江戸時代家康が漁民を連れてきた)芝浦、品川、羽田へ。漁師のコミュニティがあり、町割り、敷地割、祭り(例:荏原神社の海中渡御/御神面神輿海中渡御『通称 かつば祭り』)が重要であった。これは外国人も近年大変興味を持って見ている。

3. 近代の東京(明治時代)もウォーターフロントの発展があった

文明開花のシンボルとして建てられた「築地ホテル」は築地外国人居留地であった。楓川沿い(日本橋川から分かれる)には日本で最初の第一国立銀行が設立され、近代日本のシンボルとなって行く。隅田川沿いにはジョサイア・コンドルが設計した初代日本銀行となる建物(ベネチアゴシックとイスラム様式でコンドルが設計)が登場し、その弟子辰野金吾が日本橋川沿いに建つ渋沢栄一邸を設計した。常磐橋の近くに辰野金吾設計の日本銀行がつくられたが、近年その免震工事が行われ、当時の技術の素晴らしさが調査でわかった。昭和初期に登場した日証館は、美しい自前の防潮堤をもつ素晴らしい建築であることがわかってきた。水から直接立ち上がる建築はもっと評価されるべきである。

シンポジウム&パネルディスカッション

東京に秘められた水都としての可能性

法政大学江戸東京研究センター 特任教授 陣内 秀信

4. 山の手の研究からいよいよ江戸城へ

江戸城すなわち現在の皇居を囲む内濠、外濠のもつ水の空間としての価値を考える。地形を活かしつつ人工的に創り上げた水循環を内包した空間構造は、世界でも極めてユニークで価値が高い。東京の都市空間を水の視点から再考する。7つの丘にうまく尾根道を通した。ローカルなコミュニティは谷合に発展した。武士と町民はお互いに助け合って生活圏を支え合っていた。凸凹地形からなる山の手を対象に、多くの大名屋敷が丘陵の斜面緑地に立地し、豊富な湧水を用いて回遊式庭園をつくった。第2期で日比谷入江に注いでいた「平川」を道三堀につないで流路を変更し、現在の日本橋川の原型を作った。そして第3期で内濠、外濠を整備した。世界の城を比較し、紫禁城はシンメトリーで真っ直ぐな作りであったが、江戸城は地形を読みながら動線を90度回転させながら登り、大奥のさらに奥に天守閣がある。明暦の大火後二の丸と本丸の間にあった濠が埋められたがそれ以外は変わらない。道灌堀もある。

1636年に完成した外濠も自然の地形を利用して四谷から流れていた紅葉川をさらに深く掘って作り、内濠も牛ヶ淵と千鳥ヶ淵を堰き止めてダムのようにして円盤状に結び水の循環系を作って行った。植栽で見ると現在この辺りは桜で有名だが、これは明治以後で防災上作られた江戸城周りに桜を植えることはなかった。これは石垣の研究とともに緑が増えた植栽の研究もあるべきです。さらに広げて「東京スリバチ学会」と連携して都市の凸凹の研究や上野の森の山の辺と水の辺がセットになっている空間の研究も万葉以来の日本人の憧れの対象として研究を進めて見たい。湧き水の循環や仕組みにも言及する。「神田上水」大名屋敷の研究や芭蕉庵、水神社、斜面緑地の研究、椿山荘、御茶ノ水渓谷。ここを神田川から船でみたらとてもいい。

5. 武蔵野、多摩地域に考察の対象を広げる

中世・古代、さらには縄文時代まで遡って、地形・地質、湧水、池、河川などの自然条件をからめつつ、東京郊外の地域に光を当て、地形と水からその個性豊かな成り立ちを研究して行く。武蔵野を代表する湧水池の井の頭池とそこに水源をもつ神田川。江戸初期に武蔵野台地の尾根筋に見事に掘削された玉川上水。国分寺の崖線の湧水を活かした近代庭園と用水沿いの古くからの農村集落。湧水依存の中世までの集落構造に加え、江戸初期の用水路建設で豊かな水田風景を形成した日野。こうした多彩な事例を通して水循環システムと多様な水辺環境の価値を明らかにしたいものである。

6. 水辺環境の価値

都市と田園を一体として捉え、農村の豊かさと都市の繁栄はつながっている。これらの多様な水資源と水の空間は東京の誇る大きな財産であり、その再評価は自然と人間の共生を目指す21世紀の世界の考え方にも大きな示唆を与えるに違いない。 以上



2020/10/10 第1版発行

財団設立 3周年記念行事 シンポジウム&パネルディスカッション  
第Ⅱ部 調査報告・江戸東京歴史文化回廊  
都市史研究家 後藤 宏樹

調査報告は機関誌第3号、第7号別冊、第8-2号等、HPページでも報告しております。

江戸・東京の指定文化財と未指定も含めて約600件以上の歴史文化遺産を実際に歩いて画像と種別、地点(住所・緯度経度)情報、説明を一覧表とし、江戸時代から昭和初期、地域は御府内の旧15区、現在の8区を対象とし、調査しました。

さらに委員会討議のテーマを抽出して江戸城、大名屋敷、寺社、近代建築物、都市の課題、名所に関わる種別の調査を行いました。



1. 江戸東京の歴史的特性 次の五項目で整理しました。

- ①本丸周辺は城門や櫓などの建築物が保存・復元されています。
- ②江戸城は近世封建社会の確立と動向に対応して城郭整備が行われています。
  - ③江戸城外堀を中心に武家地、町地、寺社地が置かれ、日本橋を起点とする五街道と城下町が整備されたことです。
  - ④江戸の城下町の範囲は、現在の8区が該当、各区がそれぞれ文化財保護などに取組んでいるために、近世都市のあり方が解りにくくなっています。
  - ⑤皇居(皇城)となり、近代化や災害、戦後復興などの経緯を示す近代化遺産が分布しています。

2. 江戸の町割と地形

江戸城は武蔵台地縁辺に立地し、城下町は西の台地と東の低地からなり、7割が武家地といわれ、神田・日本橋といった東方低地に主要な町人地が置かれ、街道沿いに町人地が延びています。

3. 江戸と現代の街区比較

現在の街区の多くは江戸時代の町割の上に成り立っていることがわかり、起伏のある台地では尾根道と谷道を中心に町割りされ、現在も「●●坂」と名付けられ、江戸時代来の道筋が残ります。

4. 近代以降の行政区画

東京府は明治11年に旧御府内を15区に分割され、現在の8区に該当します。

5. 江戸城本丸の文化財

本丸には慶長11年、家康時代の工事で完成した曲輪の遺構が残り、三代家光の寛永年間に江戸城は完成し、現在の本丸周辺は、明暦大火後に改修された曲輪がみられます。

6. 江戸城外郭の文化財

大都市の高度利用、常に開発が進む都心にあって江戸城外堀の遺構が残ることは、貴重となっています。

7. 大名屋敷

全国約250家以上の大名が江戸に屋敷を構え、庭園等が25箇所、屋敷門が20箇所程現存しています。

8. 寺社地

城下町の周辺に多くの寺院が現存しています。特に寛永寺と増上寺は徳川将軍家の菩提寺です。

9. 江戸の名所 災害に関わる文化財

堀や海の沿岸が水害を頻発していたのも事実で、自然地形を大きく改変した大都市江戸の宿命でもあり、また、人口密集による火災被害を示す痕跡も文化財として残されています。

10. 近代の文化財

大名屋敷など実業家などの邸宅に引き継がれ、近代鉄道網などの文化財も残っています。

11. 歴史文化遺産の見える化

デジタル情報発信を活用し、Googleマップに画像と説明を落とすことによって、スマホやタブレットを持って文化財巡りができ、AR・VRを活用した取り組みでは江戸城本丸御殿をVRとして再現することも試みられています。

以上

財団設立 3周年記念行事 シンポジウム&amp;パネルディスカッション

## 第Ⅲ部 パネルディスカッション

まずは、文化財の価値とストーリー（物語）についてからはじめよう

【コーディネーター（CN）：清水】皆さまこんにちは。



このパネルディスカッションは、いまの基調講演と調査報告を受けて、パネルディスカッションを行います。壇上の5名の都市史、建築史、都市景観、都市計画、まちづくり、それから観光の専門分野は、今後、計画や事業を進めていくときに必ず欠かせないプレイヤーになると思っています。そういった意味でも、次の活動に向けて、今後どのように展開していくか、を主として議論できれば、と思っています。まず一番目が「東京の歴史や文化まちづくりがこれから目指すべき方向は何か?」、次に、そこに向けてどういうアプローチを取り得るのか、最後に基本構想の大義、即ち、何のために、誰のために、どういうことをやるのか、について改めて共通認識によるまとめをさせて戴きたいと存じます。

【パネリスト（PN）：海野】文化遺産の多様な価値観とストーリー化（物語）

私の話としては文化遺産の価値がどのように作られて、どこを重視しなくてはいけないのかの話と、昨今の文化財の活用に向けた文化財の考え方自体の変化の中で求められているストーリー化の話です。これらに対して、メリット・デメリットについてお話をさせていただきたいと思います。

そもそも文化遺産・文化財の価値は、例えば国宝・重要文化財といわれるような指定文化財に関して言えば、例えば法隆寺金堂、あるいは東大寺大仏殿といったような分りやすい文化財といった既存の価値観に価値が追加されてきました。例えば、近代の灯台なども重要文化財に入ってきており、「まちなみ」という意味で重要伝統的建造物群保存地区とか重要文化的景観とか多様な価値観というものが増えてきています。文化遺産の価値というのは、ある定点で定まったものではなく、時代に応じて変化して蓄積していく概念を有しているものということになります。



また、「桂離宮」は未指定の文化財ですが、未指定文化財というのが文化遺産として無価値であるということでは決してないということについて努々忘れてはならないということになります。

更に、文化遺産の価値という話、地形から各時代を積層させてきた価値というようなものが存在するという話。文化遺産の作った人々や舞台あるいは場所の連続性といったような積層性という問題、更に建築というものがもっている象徴的な意味だとか表現装置としての社会的価値、更に細かく見ていけば規模や細部といった違いということから社会における位置づけがみえてきます。特に建築に関して、都市との関係性で言えば、スケールが違う中でそれぞれ価値があるということを常に理解しておかなくてはなりません。それは小さいところでは、建築あるいは集住していく集落、そして都市を形成していく、そのバックグラウンドには地形があるわけです。この全ての部分で価値をそれぞれ把握していくことが必要です。

ただし、この文化遺産というのは一目では価値が分らないということも忘れてはいけなくて、ここの顕在化というのはやはりキーになってくる訳です。

わからない価値は調査を通して明らかにする。これは、今回、調査研究委員会のスタート、最初ですので、ここの中が大変に重要になってくる。これを踏まえてリストアップによる把握の重要な作業は、価値を理解しやすいストーリーとは別に非常に重要な要素です。一方で、デメリットの一つは分りやすいものだけが価値があると誤解されやすい点です。この危険性は避けなくてはならない。ストーリー性の流れは社会との共生とい

財団設立 3周年記念行事 シンポジウム&パネルディスカッション  
**第Ⅲ部 パネルディスカッション**  
 過去から学び再発見する-環境破壊やジェンダーの問題

う意味で可能性を秘めているのですが殊に建築文化遺産に関して言えば「本質的な価値」をきちんと把握していくことが、これまで以上に求められるのではないかと思います。

ローカル・プライドは地域のブランド化へ  
 最後に、外部の専門家により客観的な指標で調査することは重要でそれをストーリー化し、ローカル・プライドをもった語り部的にストーリーを紡いでいく作業が今後出てくると思います。ローカル・プライドは地域の中心になる要素もあり、地域をブランド化するという意味でも、こういった文化遺産はコアになってくると思います。

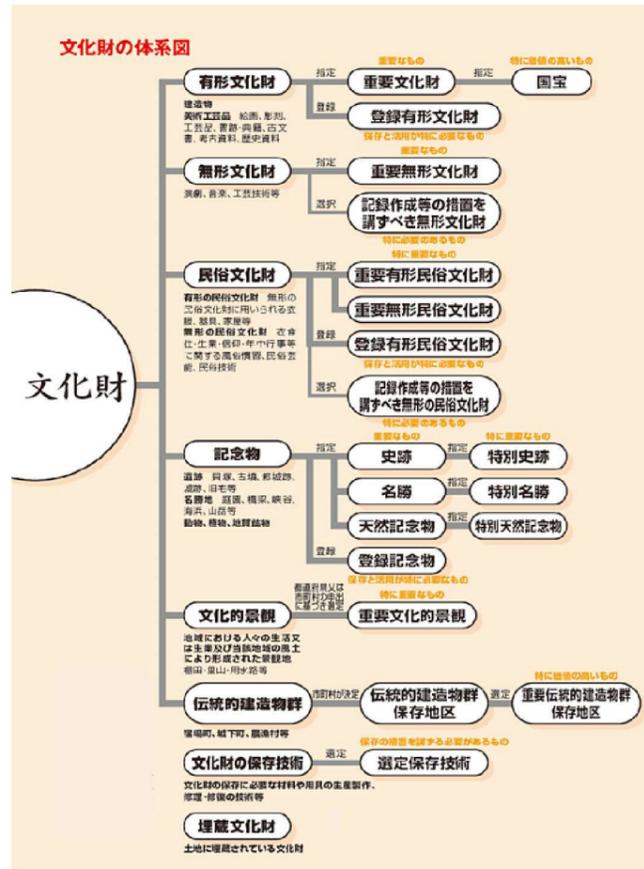
例えば原爆ドームは、原爆を受けた歴史によって、価値が付いているものです。また現代における価値というのが未来における価値とイコールではないこと、そして未来に文化遺産を享受できる権利を確保するということが重要です。現代の我々が文化遺産を使い倒していいのではなくて、未来に文化遺産を享受できる権利というものと相互関係をきちんと考えながら遺していかななくてはならないと思います。

【パネリスト (PN)：岩淵】 過去から学び、現代の問題を再発見する、というストーリーも必要  
 過去は現在の鏡、「鑑戒」(Mirror of modernity)

過去は現在の鏡です。史書編さんの基本となる「鑑戒」という中国の言葉があるように、過去から何かを学ぶということが重要です。文化財の活用においてストーリー化(物語)をすすめる際には、明るい過去像を描きがちですが、こうした「鑑戒」という視点にたった時、それだけで良いのか、ということを示し上げたいのです。私は現代の問題の原点・出発点という考え方をストーリー化の中に入れていく必要があるのではないかと、暗い過去と暗い現在、そういった見方も必要なのではないかと思っています。



一つには、近年、環境の破壊は近現代の産物ではなくて、それ以前からはじまっており、人為的な自然という舞台の中で人は生活していたのだ、という考え方が提起され、地質年代のとして「人新世」が提唱されています。この見解に従えば、都市では当時、最大規模の開発が実施されたということになります。陣内先生はお話の中で自然と共生していくという部分を強調されましたが、カルチャーランドスケープというご発言があったように、その自然とはまさに人為的な自然であり、江戸時代の人々はそのもとで生きていたのです。したがって、その結果、遭遇した災害について、火災や洪水の供養碑などもストーリーに入れていく必要があると考えます。



文化庁 HP より

財団設立 3周年記念行事 シンポジウム&パネルディスカッション  
**第Ⅲ部 パネルディスカッション**  
 多様な存在・地域とどう連携するか

二つ目の視点は、当時の社会の問題になります。江戸時代の社会には身分制が根幹にあり、さまざまな差別や問題をはらんだ社会でした。たとえば、多くの町人は狭い空間に、そして低地の底に住んでいたわけです。また、ジェンダーの問題では女性の問題のみならず、たとえば男性の娼婦も存在します。これらを有形の文化財で示すのは難しいですけども、遊女の投げ込み墓などが例としてあげられましょう。

また、都市社会の問題としては、たとえば寛政の改革で設置された、都市流入民のうち物乞いのような人々を収容する人足寄場があげられます。これを、単に更生施設と評価するのではなく、貧困と権力の問題としても示す必要があるでしょう。捨て子や迷子の問題としては、迷子石などがあげられます。江戸の都市社会がはらんでいた問題も意識して、ストーリーを構築すべきと考えます。

【パネリスト (PN)：福井】 歴史文化とまちづくり「地域とどう連携するか」

外濠については、環境改善や歴史に多くの大学が研究成果を上げてこられました。それを基にどうやって地域にそれを還元していくのか。外濠市民塾もそうです。それで実はこの時期に、外濠を開発したいとの要望もでてきて、それを止めながら、歴史文化を大事にするかという複雑な活動をして参りました。それで、「玉川上水・分水網を生かした水循環都市東京連絡会」の提言を通して最終的には東京都まで提言した経緯の話になります。



最初は勉強から機運が高まり、昨年3月に外濠再生憲章により将来の考え方を提示しております。ワークショップや地域や学生、企業の方々とは色々議論をしたんですが、外濠の将来像として外濠開削400年にあたる2036年に向けて実現したいという地域の要望を表しました。江戸東京は非常に大きく多様な存在があり我々のような研究者、学生、住民の方、商店街の方、企業の方、中高の教育機関もあります全然違う立場で関わる特徴や面白さがある。企業市民という言葉にあるように、この活動も最初、地域のD社等の声掛けから始まり、複数企業が外濠について何かしたいという声があがりました。江戸東京の歴史性や研究、個人的な体験を加え議論を繰り返すことにより活動は、「シビックプライド」に繋がっていくと思っています。

歴史性の理解と尊重と自分の生活意識とは多分表裏一体で、自分の環境として捉えるということを一生涯懸命やっています。そうすると安易なストーリーじゃなくて本当に何が大事なのかってことを理解することに前向きな人が非常に多く学校や地域と関連したことのメリットが大きいので、今後も活かしていきたいと思います。石垣があり、上水があり、地形とまちの関係も風景の点ではわかりやすい、しかし、江戸東京を成立させているシステムの伝え方は難しく、単なる有形文化財の集合体ではなく、それらの関係性が生み出している価値をどうやって表現するかということが我々の課題ではないかと思っています。



「外濠再生懇談会」資料より

## 第Ⅲ部 パネルディスカッション

### 市民の日常生活の歴史的文化的環境が大事

【パネリスト (PN) : 中島】 日常の中の歴史的環境こそが大事



歴史まちづくりは、歴史や文化がトータルな日常生活の中でどのようにあるのか、その状態が大事なのではないかというお話をしたいと思います。つまり、歴史文化まちづくりを構想していくというのは、文化財がある生活、地域、近隣、つまりそこに住んでる人の日常をイメージして、こういう歴史や文化がある暮らしが面白いんだとか楽しいんだとか、大事なんだと言っていくのが大切ではないかと思います。例えば御茶ノ水をボートで楽しむというの、それが日常の中で、自分の生活体験としてあるということが大事だと思っています。江戸城の話でも環境も含めても、やっぱり江戸城の歴史文化を残しながら一体、私達はどんな生活をし、このまちでどんな体験をしたいのか、のストーリーを描いてくのが大事だな、と思いました。

特に若い世代は、エコロジカルで歴史や文化に触れられる生活を好む傾向にある。現在、そういう風に生きたいという若い人たちが増えている。ヨーロッパはそういう意味では連綿とある生活像が受け継がれてきたのではないかと思います。アメリカは1990年代、行き過ぎた自動車社会に対して、かつてのアーバニズム（都市的環境で創りだされる人間の生活様式）を取り戻しつつ、現代的なテクノロジーで現代の課題に答えながら新しくしていくというニューアーバニズムに転換しましたが、陣内先生のお話しは、ある種の日本版のニューアーバニズムとも呼べる未来志向の歴史のとらえ方であり、この都市でこういう生活をしたいというビジョンが感じられ共感するところがあります。

そういう観点から、江戸城の歴史文化まちづくりの話もトータルに我々の生活をどう豊かにするか、その場を介して如何に豊かな人生を送るかという妄想を楽しみながら、ストーリー（物語）とか構想を考えていくのではないかなと思っています。

【CN : 清水】 生活に密着した歴史や文化の多様性で、新しい観光をつくる時代

4人の先生方から、2つの重要なメッセージがあったと思います。

一つ目は、目に見える分りやすいだけではない文化財、文化資源の価値を、如何に継承し未来の権利、将来世代のことも考えていくか。その為に現在の世代の身勝手に壊さないことが重要という論点がありました。一方それだけだと不十分で、今の生活とか歴史や文化がどういう風に日常に関わっているのか、その意識や活動がないとムーブメントにならないと思いました。このままいくと東京は、世界の中で見ても「行きたい都市」にならなくなってきています。東京は、わかりやすい文化財の側面からは非常に危機感があります。

都市東京をどうするか、東京は文化として理解されてない可能性が結構強いとの声もありますが、それらをどう捉えるかは重要だと思います。やはり、地域に生活に密着した歴史や文化の多様性で新しい観光をつくることは大事な取組みだと思っています。陣内先生のお話も縄文の時代から江戸へ、川の上流から広いエリアでのストーリー展開が可能だと思いますし、江戸城周辺からより広域性を持ったストーリーの方が、この後に話が進めやすいと思いました。

財団設立 3周年記念行事 シンポジウム&パネルディスカッション

## 第Ⅲ部 パネルディスカッション

### 地域から市民参加による民主的な「プラットフォーム」の創立に向けて

【CN：清水】現場から地域から、民主的な「プラットフォーム」に向けて

この3年間で、基本的なことを検討し、進むべき方向性が決まり、次の課題としてプラットフォームを含めて、どうアプローチの仕方が有り得るのかについて、少し自由に議論したいと思います。



歴史文化遺産やまちづくりをHPなど多様な媒体での情報発信を検討

江戸東京に残る歴史文化遺産の情報地図等を広く一般社会に公開して参ります。

先ずは、今回調査した600の歴史文化遺産をデジタル上に地点表示し、さらに「江戸復興地図」や現代図をデジタル化して観光などに活用できるように、これを契機に中期の事業として、順次、取り組みを漸進していきます。

※「歴史文化遺産」の当会の定義は、日本の文化財（有形・無形）をはじめ未指定の文化財及び地域固有の地域遺産など多様な歴史と文化を発見し、総合的に位置付け、まちづくりに活かす「遺産」を「遺産」として取組み、地域に、次世代に継承して近未来に託す遺産のこととします。

【PN：中島】プラットフォームの一つは文化財も有形・無形の様々な種類のものがあったり、国、都、区で指定・管理がバラバラになっているものを空間的なGISで一元的に把握するプラットフォームが、一つのレベルとしてはあります。

もう一つは、これまでの議論で出ているキーワードである「地域」との関係で構想されるものです。文化財や地域の歴史文化をどういった人々が構想し担い手となるかといえば、それは地域の人たち自身だと思います。しかし、地域の個別の活動だと出来ないこととか、共通で困っていることとかもたくさんあります。それらに対応して、ボトムアップの地域の動きを支援する、導き出していくようなプラットフォームもあるのではないのでしょうか。

この財団の位置づけと役割について考えると、そもそもトップダウン的な指向性をもっているわけではないし、市民運動としてスタートしているので、民主的なプラットフォームは、どうあるべきなのかっていう議論になるのではないかと思います。

【CN：清水】企業参加について

先程の外濠市民塾の活動のなかで、特に参加されている企業市民の方々が入ってくるときにどういった想いや期待感で入ってきて、このような活動に資金や支援が必要な時にそういう方々がどれほど貢献してもらえそうか感触を伺ってみたいです。

【PN：福井】企業が営利目的などで直接実現したいことを外濠市民塾を使って実現することは難しいでしょう。企業活動とは関係なく「長期的にみて会社のイメージアップに繋がる」とか、「東京の将来をどうしようか」ということをまじめに考えている方とのおつきあいが長続きしますね。資金はあまりかかりませんので、知恵の支援がありがたいです。建設関連ではない組織が繋がっていくところは大事にしたいと思っています。

【CN：清水】確かにそうですね。どんな世界でも、元気がないときに、一番、最後まで想いをもって協力してくれそうなおもしろい期待できないことは、観光の立場でも共感できます。

## SDGs 第三部 パネルディスカッション 持続可能な開発目標に向けて-つくる責任・使う責任、住み続けられるまちづくり

【CN：清水】海野先生と岩淵先生のほうで、どういう活動があった方が良いか、如何でしょうか？

【PN：海野】21世紀型 SDGs 持続可能な社会の形成と歴史的建造物やまちづくり

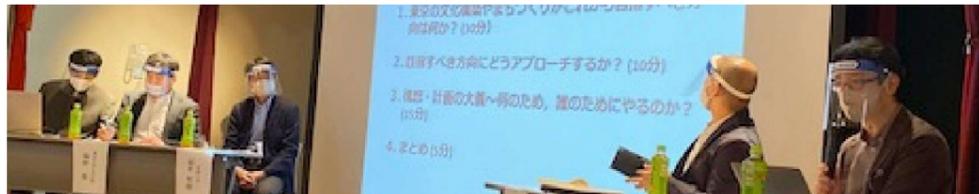
高度経済成長期のような考え方とエコロジカルで歴史文化を好む傾向にある若い世代の考え方は違う様相とのことでしたが、最近のSDGs持続可能な社会の形成は、歴史的な建造物の緩やかに変化し続けて長生きする考えと非常にマッチすると思います。プラットフォームでは、語り部の様なものができれば別の地域でも情報共有が可能なプラットフォームは発展の可能性は十分に秘めていると思います。

【PN：岩淵】プラットフォームは、市民参加が重要なポイント

私は博物館に長くおりましたので、市民参加が重要なポイントだと思います。自治体によっては、市民が選んだ文化財を登録する制度を設けたり、また自治体史編纂で市民参加の手法をとるところもございます。このプラットフォームは、対話とか話し合いの場としてうまく利用できたらと思います。

【CN：清水】大学との連携の可能性

このプラットフォームで思うところは、多様な活動体を尊重しつつ、最終局面では、どんな立場の人がリードするかの問題があります。多分行政ではないでしょうし、研究や実績から大学はその可能性があると、法政大学さんを中心とした活動は、非常に期待感が持てると思っています。



【CN：清水】江戸城等全体整備構想を策定していく場合、何の為に誰の為にやるのだろうかということについて最後に議論したいと思います。其々の立場からご放言を戴きたく思います。

【PN：岩淵】私は、それは「市民」、地域住民のためだと考えます。そして観光収入などだけに収斂するのではなく、個人レベルの生活で位置づくためのストーリーであるべきだと思います。参加だけではなく、企画から市民が考えるということも重要でしょう。文化財の保護と観光の振興の狭間で、明るい過去ばかりを描かないストーリー化を誰がリードするのか、がこれからの課題だと思います。

【PN：海野】私も基本的には市民。特に「地域の住民」が、「ローカルプライド」をもって歴史あるものとのように共存していく気があるか、そこが無い中でその「シビックプライド」を醸成するのはまず難しいだろうと。語り部の話でいうと個人が持っている想いは、多様であって、矛盾するものも共存する可能性があると思うしそれが新しい価値を伝える一つの方法になるのではないかと思います。

文化財保護の関係でいうと、お金を稼ぐことだけが価値ではないと肝に銘じておく必要があり、文化財と共生していくことも十分あり得ると思うし、観光との関わりについては、万人向けではなくコアなところで受けるという高付加価値化する方向性は十分に有り得ると思います。

## 第三部 パネルディスカッション 多様な歴史文化資源を活かした新たな都市計画、そして観光まちづくりへ

【PN：福井】今回の江戸城の話では、学術的な調査研究によって本質的価値が何か、それをどうするかという話になっています。それは核心としてとても重要なことです。ただそれを社会的に展開していくときには学術だけでは理解を得られないことが往々にしてあります。極端な話、歴史文化で儲かる人も必要です。つまり、学術分野での議論、利害関係者を説得するストーリーなど、相手に通じる言葉や論理を選ぶことが重要だと思います。

【PN：中島】ある企業が谷中に未来定番研究所というサテライトオフィスをもっています。それは商品企画部門なのですが、何かを発想しようするとき、谷中というまちの持つ歴史文化の中で働くことでこそ生まれてくるものがあるんじゃないかという企業判断です。これからはそういう観点からも、歴史や文化の豊かな場所が選ばれていくと思うんですね。

歴史文化性の環境の中で働く、集う、例えば、江戸城のある場所で、江戸の歴史や文化を感じるパブリックスペースがあり、そうした環境の中で、何か新しいものを生み出していくというアピールができれば東京でも構想できると思う。そうすると企業さんもしっかり関わるだろうし、例えば、観光の方でもリモートの時代では、観光の概念が生活や仕事と溶けあっていく中で、東京の歴史的文化的環境の中で半年働いてみたい方とか、そういった多様な人を国内外から受け入れていく、すると東京が活力を維持し発展していけるのかなと思います。江戸城の理念とかビジョンとかは自由に広げて考えていながら、一方で現実の江戸城の足元をしっかり考えて進めたら良いのではないかと思います。



【CN：清水】次なるステージ・今後に向けた課題

観光やまちづくりの立場から観ると、地域住民やそこで経営している企業の方とか、彼らの誇りや満足にも目を向ける状態にしていかないと多分観光地も選ばれない時代に既に突入しているようです。このことは、観光地のリーダーの方々も確実に自覚をされています。最終的には、地域の歴史や文化に紐付いた文化を大事にするところが勝ち残っていくのではないかと、今回の我々の基本的な調査研究の取組みもそのベースの一つで、10年20年50年100年後に振り返った時にも、非常に重要な取組みであったと、思わざるをえないと思います。

この調査・研究委員会は文化財等の調査からスタートしました。文化財のリストアップは、息の長い活動になると思います。従って、次は、歴史文化資源を都市の計画や経営、そして、次には観光にもどう活かしていくのかの議論が必要になると思います。この調査・研究委員会の役割も変わる潮目にきているのではないかと今日の議論聴いて思いました。それでは関係者の皆さんに謝意を表してこのパネルディスカッションを終わりたいと思います。ありがとうございました。

第Ⅲ部 パネルディスカッション 第一線で活躍する気鋭の研究者へ 期待こめたメッセージ  
調査研究委員会アドバイザー、(一社)日本イコモス国内委員会事務局長 矢野 和之

今日は非常に貴重な話を有難うございました。

皆さまは、これから活躍される、今も活躍されていますけど、これから一番脂ののった活動される方々だと思います。かなり「うんうん」と肯くことが多かったですね。

文化財は、無色透明だったりするんですよね。でも実は7色があって、トータルで無色に見える。そういうものだと思っています。ですから、いろんな立場でいろんな価値がでてきます。確かにネガティブなものも見なきゃいけないですが、それで厚みが出てくると思うんですよね。

今日のシンポジウムは本当に良かった。3年前に私が財団から江戸城天守復元の相談を受けて、それは極めて困難ですという話から始まり、この場を設定して頂いたということになる訳で、本当にこれからやるべきことが沢山あると思いますので、よろしくお願いたします。どうも有難うございました。



## 閉会ご挨拶

一般財団法人 江戸東京歴史文化ルネッサンス 副理事長 齋藤 蒔

本日は招かれざるコロナが跳梁する中で大変長時間に亘り、諸先生の熱心なお話を拝聴することができて、本当にありがとうございました。

先ずは陣内先生からの水都論、そして後藤様からは地道で緻密な調査の成果、締めくくりには、大変なボリュームがあり、熱意・示唆が頂けました、気鋭の先生方の迫力あるディスカッションを展開していただきました。これは後々しっかりと想いを刻み込んで取組んでいかないといけない、という気持ちになっております。

まさに超高層ビルが印象的に海岸部に点在しているんですよね。それが文化、といういか文明の進歩であるかの如く思っている若い人たちも多いので、これからの我々の取組みは大変重要で大事さがあるのではないかと考えております。

今後とも想いを同じくしていただく先生方にご指導いただきまして、是非、江戸東京を近未来における世界遺産に相応しい存在にできればと念じているところでございます。そのような意味で、熱意あるご支援をいただき、これからもがんばっていきたくと思っています。心から願いを申し上げて、締めくくりとさせていただきます。本当にありがとうございました。

一般財団法人 江戸東京歴史文化ルネッサンス

〒113-0033 東京都文京区本郷 2-25-6-1023

Eメール zaidanedojo@gmail.com ホームページ <https://zaidan-edojo.or.jp/>

※事務所移転、メールアドレス変更しております。

また、現在、新型コロナウイルス対策のため、テレワークを中心に活動致しております。ご用の際はEメール若しくはハガキ等郵送にて頂ければ幸いです。

財団設立 3周年記念行事（2020年10月18日）

## シンポジウム&amp;パネルディスカッション

近未来の世界遺産を目指し  
江戸城等全体構想を視野に入れて  
江戸東京の歴史文化資源を活かした  
観光まちづくりの形成を目指す

## 参加メンバー

\*総合司会 川野 恵可 （一財）江戸東京歴史文化ルネッサンス 理事

## 1) 共催者ご挨拶

小竹 直隆 （一財）江戸東京歴史文化ルネッサンス 理事長  
苅谷 勇雅 （一社）日本イコモス国内委員会 副委員長、元文化庁文化財監査官

2) 来賓ご挨拶 本保 芳明 国連世界観光機関 駐日事務所 代表、初代観光庁 長官

3) 基調講演 陣内 秀信 法政大学江戸東京研究センター 特任教授

4) 調査報告 後藤 宏樹 都市史研究家

## 5) パネルディスカッション（パネリスト・調査研究委員会 委員）

岩淵 令治 学習院女子大学 国際文化交流学部 日本文化学科教授  
海野 聡 東京大学大学院 工学系研究科 建築学専攻准教授  
○清水 哲夫 東京都立大学大学院 都市環境科学研究科教授（調査研究委員会 座長）  
中島 直人 東京大学大学院 工学系研究科 都市工学専攻准教授  
福井 恒明 法政大学 デザイン工学部教授

## \*アドバイザー（調査研究委員会）

苅谷 勇雅 （一社）日本イコモス国内委員会 副委員長、元文化庁文化財監査官  
矢野 和之 （一社）日本イコモス国内委員会 事務局長、文化財保存計画協会代表

## \*オブザーバー（調査研究委員会）

小竹 直隆 （一財）江戸東京歴史文化ルネッサンス 理事長  
齋藤 蒔 同 副理事長

## \*事務局（調査研究委員会）

内田 久江 同 専務理事  
山崎 麻央 同 理事  
後藤 宏樹 都市史研究家

